

特別記事

2013 年 年頭所感

～支部会巡りとバリアフリー教材作り～

嶺重 慎（会長・京都大学大学院理学研究科）

皆さん、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。昨年は、（金環）日食、金星の太陽面通過など、天文イベントに恵まれた年でありましたが、今年も二つの大きな彗星接近という話題があります。「天文教育」誌では年間を通じて彗星を特集し「思い出の彗星」という連載が始まると聞いています。全国的にさらに活動をもりあげるきっかけとなることを期待しています。

今年も強調しておきたいのは、みなで各地の支部会を盛り上げよう、ということです。ここ数年、私は全国各地で開かれている支部会にできる限り出席しようと心がけています。なぜか、九州支部会だけはずっと縁がなかったのですが、ついに昨年 12 月、念願の会合に参加することができました。運営委員の原さん、橋本さん他のご尽力により、熊本城の敷地内にある熊本博物館で支部会が開かれ、のべ 21 名の参加者を得てまことに盛会でした。招待講演を含めた計 18 件の発表、どれをとっても興味深いものでしたが、初日に招待講演された熊本日日新聞社の鹿本成人氏の「犯罪や事故だけだと暗くなる紙面を明るくする素材として天文の話題は受けるのです」といったお話や、白鳥さんが全国各地の（業界紙も含む）新聞社から集めてこられた金環日食の新聞記事は、特に印象深いものでした。一口に「支部会」といっても、それぞれの地域独特の「色」がついている思いがします。関東と近畿は、人口が集中していることから、会員数も多く、いろいろな色が集まってミニ年会のような賑やかさですが、地方にいきますと、味わい深い「色」が出てきます。日頃、地元に着して土地

にしっかり根をおろし、草の根的に活動をおられる方々が、年 1 回の支部会に、時間かけて集まってこられます。独特の「色」とは、そうした地道で実直な活動から醸し出された品格のようにも思います。そういう魅力ある人たちにお会いできるのが、支部会巡りの大きな楽しみの一つです。

例えば、北海道支部会に出ますと、「星空散歩ねむレンジャー」という不思議な名前のグループの方にお会いします。会長の西原さんのもとに星好きの仲間が集まり、国内観望会はもちろん、海外にまで遠征していく元気なグループです。彼らに言わせると「天文教育普及研究会北海道支部？名前が固すぎる、もっと柔らかい名前に改称しなさい」（未だ実現していませんが）。

東北支部は、面積が広いこともあり、参加者が場所ごとに大きく入れ替わります。したがって、支部会ごとに違う地域で活動しておられる方々にお会いできるのが楽しみです。今年度は宮城教育大学で若い学生たちに会いました。前年度は、前から行ってみたかった青森の山内丸山遺跡で青森の方に、その前は大崎市近辺の方々にお会いしました。人だけでなく夜の懇親会もまたさまざまです。

中部支部は、温泉泊が多い支部会です。若い学生も多く集まり、お湯につかり、酒を酌み交わしながら夜遅くまで天文談義を深めていくのです。特に 3 年前、支部会の前日に会場の本曾福島で大雪が降り、おかげで味わった露天風呂での雪見酒は忘れがたい思い出があります。

中国・四国支部は、前・現執行部を多く排出している「名門」であり「濃い」支部会を楽しめます。というものの、決して堅苦しい雰囲気はありません。むしろ、逆で、年会の宴会芸を毎回披露しているユニークな集団です。山根さんと園部さんの若さがベテランの方々を牽引している印象があります。

さて、そのような支部会にいて、私は変わりもせず点図の話やユニバーサルデザイン天文教育の話をしています。2 年前の年頭所感で、「(天文の話を聞くと) 明るくなる」という感想を述べてくれた全盲の女子高校生の話を書きました。昨年も、ユニバーサルデザイン天文ワーキンググループの方々と共に製作した点字版、音声版を含む天文学習教材を携え、盲学校回りをしてきました(教材に用いた点図の一例を、図 1 にあげておきます)。出前授業で生徒たちに天文の話をするとき、「宇宙を学ぶということは、私たちについて理解を深めること」ということを肝に銘じています。これは、2005 年に岩波ジュニア新書『天文学入門』の企画をねっていたとき黒田さんが繰り返し強調されたことです。



図 1 点図—馬頭星雲(小松崎テイ子氏作)

宇宙が生まれておよそ 90 億年で太陽系ができ、地球が生まれて 46 億年で私たちまでいきました。そういう意味で、私たちという存在は、宇宙 137 億年の歴史でじっくり準備されてきた、ということもできるのかな、と思います。「私たちひとりひとはユニークで貴重な存在である」、そのことを語る語り方は、宗教、文学など、いろいろありますが、科学的に語るというとき、天文学に勝る学問はないように思います。

今、「業績」とか「効率」とかいうことが巷にあふれています。そこでは「数」がものをいいます。しかし「数」にとらわれると、目の前にいる「一人の」人が見えなくなります。目の前の人が見えないと、やがて私たちは自分自身をも見失うでしょう。

思えば、私たちの先達たちは、観望会を通じて目の前にいる人を大切にすることを、昔から実践してきたように思います。私たちの行っている活動は、今の社会の価値観に逆行しているようですが、一人ひとりの魂と向き合い、共に感じ、共に学ぶ感性を育む活動は、長い時間では、確実に世に広がっていくものと私は信じています。

今年も多くの活動を計画(既に実行)されていることでしょう。星を見つめ、宇宙に思いをはせて、ひいては自分と、自分の目の前にいる人々への思いを深める、そのような活動を今年も続けていきましょう。そして、その報告をぜひ「天文教育」誌に発表していただき、さらに多くの方々と共有しましょう。

嶺重 慎